

## 〔学会報告〕

### スコットランド史研究の諸相

——大英十八世紀学会について——

田 添 京 二

1

一九七七年の九月二十三日から二十五日にかけて、現在私がお世話になっているエディンバラ大学を会場に、大英十八世紀学会 *British Society for 18th Century Studies* の秋期大会が開かれた。共通論題は、「十八世紀スコットランド」。わが国でも、戦後の一時期、「十八世紀の会」という研究グループ活動があったことを聞いているが、近年まったく消息を絶つたのは残念である。一方、大英十八世紀学会は、設立以来の学際的な特質を保持しながら、仲々に活発な活動を展開しているのを見受けた。なにがしかの新鮮な情報を提供するとともに、ヨーロッパ学会の雰囲気的一端なりとお伝えたいと考え、以下簡単

——スコットランド史研究の諸相——

な報告をお届けする。

なお、大英十八世紀学会は、インター・ディシプリナリーな文化史研究を標榜して、一九七一年に設立された若い学会である。組織的には、国際十八世紀学会 *International Society for Eighteenth Century Studies* に加盟して、その下部機構となっている。この国際十八世紀学会のほうは、ジュネーヴにヴォルテール研究所を創立した故ベスターマン博士——彼は一九七六年秋になくなった——の熱意と努力で出来上つた学会であり、四年に一度、啓蒙思想国際会議という大集会を主催することわが国にもよく知られている。

2

学会の受付は、第一日の夕方からシェリー・レセプションの形で行われ、スコットランドが生んだ大建築家でアダム・スミスの同郷人でもあったロバート・アダムによって建築が始められ、W・H・プレイフェアによって完成されたエディンバラ大学のオールド・コレジが会場にあてられた。広い中庭で、どこの会場入口やら分らずにいると、これまたキョロキョロと柱の

かげから歩み出た初老の上品な婦人がいる。両方から「十八世紀学会にお出になるのですか」と同じことを尋ね合ってふき出してしまふ。自己紹介し合って、ニュー・カースルのラトクリフ女史と分る。言語史を専攻しているとのこと。そこへお巡りさんのような制服の守衛さんがかけつけて来てくれて、無事会場まで案内される。レーバーンの筆になるアダム・ファーガスンやウィリアム・ロバートソンの、写真ではおなじみの肖像画をはじめ、大学にかかわりのあった有名教授たちの絵が会場から階段までズラリとかかかっていて眼をみはらせる。ラトクリフ女史が人差し指だけの手招きをするので歩み寄ると、かたわらのメガネのおばさんを紹介してくれる。「イヴォンヌ・ノーブルさんです」といわれて、「あゝ、乞食オペラの？」と間の抜けた返事をしてしまふ。舌足らずのようなユックリした話し方をするこのやさしげな人と、あの詳細な音楽史的・演劇史的研究とが一瞬うまくつながらなかったのである。

皆さんかなり酔が廻ったと思われる頃になって、講演会場へ導かれる。五十人ほどの参会者が二列になってテーブルを囲み、正面に今夜の報告者、エディンバラ大学経済史学部のロザリンド・ミチスン Rosalind Mitchison 女史が座る。女史は

近年の目覚ましいスコットランド史研究興隆の推進者のひとり。多面的なレパートリーの持主であるが、今夜のテーマは、「十八世紀スコットランドにおける自治体の責務と土地所有者階級」 Communal Responsibility and the Landowning Class in 18th Century Scotland。彼女の秀作のひとつ「旧スコットランド救貧法の形成」The Making of the Old Scottish Poor Law (Past and Present, No. 63, May 1974)とこれに続くケイジ R. A. Cage 博士との論争 (Ibid., No. 69, Nov. 1975)の延長線上に位置するものと予想できる。サブ・マシーン・ガンを乱射するといった趣の有名な早口だが、彼女の研究室に同居させてもらっているおかげで、何とかついてゆくことはできる。その要旨はつぎのようなものであった。

十八世紀を前世紀と比べた場合、直ちに眼をうつ社会象のひとつは、前世紀に頻発した破滅的な飢饉が見られなくなることである。むろんひどい不作は依然として続くのだが、一見明瞭な人口減少を伴う十七世紀型飢饉に結果しない。その原因はまさに複合的であるが、重要な一因は、一七〇七年のイングラントとの合邦以後、大土地所有の桎梏から次第に脱け出して、地域社会の指導層となった中小土地所有者 heritor が、救貧

事業に参画しはじめたことにある。元来、救貧事業は、教会を中心とし、Kirk Session によって運営されてきたが、その財源は専一的に土地所有者にかかる救貧税および任意拠出金に依存していた。合邦以後、地域の経済・社会問題に主導的役割を果さざるをえなくなった彼らは、拠出者の権利を主張して、救貧基金運営に参加しはじめた。時に彼らの主張が、負担軽減を求めて、さなくとも厳格にすぎないスコットランド救貧法体系の厳正履行に結果する場合もあったにせよ、全体としては、宗教的規制の排除、変革期社会の提起する新たな社会問題へのより柔軟な対応をもたらしたといえる。とりわけ四十年代からの不景気には、救貧税および拠金をもって穀物の緊急輸移入を実施し、これを法が規定するよりもはるかに広い一般貧民に安くわける、といった実効のある積極的活動を展開したのであった。

報告のまとめに入ったさわりところで、女史が「この極めて示唆的なジニイムズ・ステュアートからの引用は、田添教授の御教示に負うところです」といって、私が十年も前に読んだ記憶で女史に教えた Consideration on the Interests of the County of Lanark, 1769 の一節を読み上げたのには、いささか照れ臭い想いをさせられた。数名の質問者が立ったが、ス

コットランド経済史にはなじみのうすいイングランドからの会員の初歩的内容のものばかりで、これまで、スコットランド救貧体制が、法のたてまえ通りに「強健な貧民」を保護対象から排除して来た、とする通説——それは新救貧法（イングランド一八三四年、スコットランド一八四五年）を生んだマルサスIIチャーマーズ的視角からする発掘資料に依存することによって、その視角を採る者も反対する者も期せずして一致するが故に成立した——に対する反論としての基調には迫りえず、徹頭徹尾第一次資料で築いた要塞のごときミチスン報告の外壁をひっかいただけという印象であった。

報告終了後、大学のスタッフ・クラブで開かれた夕食会は仲々に豪華で、福島大学が全国学会を引き受けた時の苦勞を思い出して、五ポンドの会費では足が出るだろうとつい余計な心配をしたが、世話役のJ・V・プライス（英文学部、独立戦争期の英米関係史で業績をあげている）にきくとやはりかなりの持出しになるとのことであった。コーヒーマシンの時間になると、ミチスンが報告のなかでメンションしたのが利いたとみえて、五人の会員に囲まれて、どうしてステュアートなどやるのか、とかエディンバラでもステュアートを讀んでるのか、などと問

いつめられてひと汗かかされた。ステュアートは、経済学史のうち正しく復位されるに値する大物だし、大ブリテンの学史家が、スキナーを別にすると、スミスとステュアートは、ヨーロッパ的規模での新思想形成の流れにさおさしながら、大ブリテン、とくにスコットランドを土台にして成立した体系として、いつも対比しながら読まざるべきだ、という点を忘れておられるように思う。ただし、エディンバラでは、両体系が時代の経済社会問題をいかに解こうとしたか——それなら日本にいてもやれる——ではなしに、彼らが見ていた時代の問題がそもそも何であつたかを勉強しようと思つてゐる、という返事は、ある程度彼らを納得させたようにみえた。

3

翌二十四日午前は、第二報告、ケンブリッジのダンカン・フオーブズ Duncan Forbes の「ヒューム政治学におけるヨーロッパ的次元」The European Dimension in Hume's Science of Politics から聞いた。フオーブズは、無自覚に English writer と見なされてきたヒュームのうちに、スコットラ

ンド的背景が強く生きており、しかもグロテイウスやプーフエンドルフ以来の大陸自然法思想の本流から汲み取つたものごとくと結合していることを重視すべきだ、と前置きしながら、彼の政治科学方法論の「固い核心」が、スペクテイターとして物を観る、つまり真理と哲学を土台にし、汎ヨーロッパ的に文明社会全体の観点から考察するという心的態度にあつたことを強調する。その例証を、「イングリランド史」および「政治論集」における政治、政党論のうちに求め、この配慮なしにヒュームのウィング批判、ウイルクス事件への対応、孤狩りとロウジャー・ドゥ・カヴァリーに象徴される古き良き大ブリテンへのノスタルジー等々から、直線的に彼の保守性、トリー主義、さてはジャコバイティズムを導き出す「ステレオタイプ」の既成理論に再考を迫つた。

さすがに力のこもつた立派な報告であつたし、フオーブズが強調した心的態度を不可欠の資質として含む「世界市民」Citizen of the World という立場が、十八世紀啓蒙、とりわけスコットランドのそれにとつて、ほとんど決定的な方法的視座になつていた、という仮説をとり続けている私にとつては、大いに同感し、啓発されるどころが多かつた。それにもかかわ

らず、当時の大ブリテンとヨーロッパにおける現実のなかで、ヒュームの主張が事実保守的役割を果たしたばかりか、かの視座そのものの中に、実は結局ソフィステイクイトされた保守性に回帰しがちな限界がありはしなかったか、と見るのが私の考え方なので、一方甚だ喰い足りない想いも残った。

討論に入るや、貴方はヒュームがイングランドとフランスを、法の支配 *regular government* || 文明社会 という枠でくくり、両国の差は程度の差だ、と述べたことを指摘され、ウィングのシドニーのように、イングランドのみを *civil government* とみて、フランスを専制主義に分類する見解と対比されたが、政府と高等法院の深刻な対立をくり返していたような当時のフランスで、法の支配を語ることができるのか、とか、ヒュームの *civilized monarchy* と *enlightened despotism* とはどちらがうのだ、といった質問が出たのは、無理からぬことと思えた。

4

午後は、市の北西郊外、フォース湾に面したホープトン・ハ

— スコットランド史研究の諸相 —

ウスの見学である。リンリスゴウ侯の邸宅というよりも、ホルード宮殿の建築者として有名なブルース *Sir William Bruce* によって十七世紀末に造営が始められ、アダム父子 *William, John and Robert Adam* の手で増築完成されたことで有名な建物である。アダム好みの両翼を張った巨鳥のような建築が深い木立ちの間から現われてくる長いアプローチからの景観もさることながら、一部に榎相林かと思われるほど見事なブナ（ただし *Fagus sylvatica*）の群落を含む広大な庭園には、ただ感嘆するほかなかった。これら貴族の旧所領は、莫大な維持費に堪えかねて、今日ではほとんどが、入場料と政府からの補助金めあてに公開され、庭はナショナル・トラストからの援助を受けたり、自然動物園や遊園地に仕立てられている。それを裏返せば、かつての貴族たちの超絶的な富と権力の大きさがしのばれる、ということにもなる。建物へ足を踏み入れると、名画の数々と室内装飾の豪華さに驚かされる。私はいわゆるアダム・ハウスのいくつかを見て、彼が建築家といっても、ただ柱や壁をぶっ立てるだけでなく、内装までやったこと、しかも彼の才能はむしろ後者の点で光っていたのではないか、と思うようになった。これも概説書で読んだのでは分らない点で、実物教

育の功德のひとつであらう。

お茶の時間を西の張り出し(とは Ball Room)に設けられた食堂で供にしたあと、私はセント・アンドルーズ大学のテイラー教授 Samuel B. Taylor に誘われて海沿いの小径を歩いた。教授は、ベスターマンをたすけて国際十八世紀学会の創設にあたり、みずから数年前まで大英十八世紀学会の会長をつとめた碩学だが、およそぶったところがなく若々しい。名古屋大学の水田洋教授が、ネクタイと上衣をつけていなかったばかりに、レストランで門前払いを喰わされ、同行していたテイラー教授が大演説をやったのに、ついに水田教授が「ジェントルマン」であることを立証できなかった、という身振り手振りの想い出話には、まわりの静けさに申訳ないような大笑いをしてしまった。

5

バス旅行の興奮もさめやらぬその夕方、市内東北部のカウゲイトにある聖セシリア教会でビュッフェ形式の賑かな夕食のあと、エディンバラの音楽史とは切っても切れぬつながりのある

教会ホールで、「十八世紀エディンバラにおける音楽出版」と題する講演と小演奏会が開かれた。チェリストでもあるデイヴィッド・ジョンソン氏の講演の中では、はじめ大貴族たちの接客用お抱え楽士を相手に小部数の印刷が行われていたのが、エディンバラ新市街の造営が進み、そこに商人や法律家などの中流階級が住みついて、文化生活を楽しむようになった頃から本格的な楽譜出版が始まり、スコットランド民謡の蒐集出版も平行して盛んになったこと、しかし廉価版(しばしばもぐりの)でイングランド市場に割り込むという後進性からは仲々脱けられなかった点の指摘に興味を惹かれた。

演奏は、器楽曲(ヴァイオリン、チェロ、ハープシコードの三声)とスコットランド民謡(バリトーン独唱)で、最初のマクリーン Charles Mclean の一七三七年のソナタは、かなり露骨なイタリアン・バロックのさるまねが面白いという以外に面白いところがなかったが、さすがにペンタトーンの古い民謡と、リズムのハッキリしたダンス曲からは、この国の人たちの素朴で土臭いながらに骨太な北国の農民魂のようなものが伝わってくる。

プログラムも終りに近く、ステイヴン・クラーク Stephen

Clarke が編曲したダンカン・グレイ（歌詞はロバート・バー  
ンズのものであった。いくつかある古い元歌は four-letter  
words を織り込んだ甚だ卑猥なものが多い）が歌われる。び  
っくりする位の早いテンポである。チェロと解説を兼ねたジョ  
ンソンが立っている。「もうひとつ別の編曲のおきかせしま  
しょう。編曲者はスコットランドを訪れたことのない人で、と  
てもスロー・テンポで書いています。どちらの編曲がいかの  
判断は皆さんにお委せします」。ハーブシコードの前奏が始ま  
った途端、やりおったなど私はニヤニヤした。となりのイヴォ  
ンスが、そこは音楽史に堪能なだけあって、すぐに気づいたら  
しく、腕組みしたままのひじで私の脇腹をつついてくる。その  
うちあちこちからのび笑いが始まり、演奏者たちも、してや  
ったりとニコニコしながら楽しげにひいている。いうまでもな  
く、ベートーヴェンの編曲である。愉快な幕切れであった。

6

翌二十五日、日曜の第一報告は、マクドゥーガル博士 Warren McDougall の「十八世紀におけるスコットランド出版界」

— スコットランド史研究の諸相 —

Scottish Publishing in the 18th Century。愛嬌のあるスコ  
ットランド弁で、つぎつぎに愉快なエピソードを提供しては皆  
を笑わせながら、世紀前半には、もっぱらイングリランド出版界  
の地方的下請といった形で、廉価版の二次出版をやり、時には  
非合法スレスレのもぐり出版までやってイングリランドともめて  
いたエディンバラ出版界が、アメリカ植民地への聖書、実用書、  
低俗読物の輸出で経済力を蓄え、後半には、エディンバラ大  
学の特約出版元だったバルフォア John Balfour のように、市  
内に一大印刷出版帝国を築き、ヨーロッパびゅうに網を張って  
情報を集めては、立派な装丁の古典書を編集出版して、スコッ  
トランド啓蒙の一翼を担うものも現われるに至る経過を語っ  
た。

つぎの報告は、ギブソン John S. Gibson の「八十年代に  
おけるエディンバラの『感覚』 The 'Feel' of Edinburgh in  
the 'Eighties」。報告者は、スコッティッシュ・オフィスの次官  
（大幅な自治権を与えられているスコットランドの「政府」と  
いってもよい統治機関。閣僚のひとりであるスコットランド担  
当相のもとにあり、現在二十四名の次官がいる）という高級官  
吏だが、われわれには、Ship of the '45' 1967 の特殊研究で

なじみ深い歴史家でもある。ちょうど私は、学会の数日前に出版された *Deacon Brodie, Father to Jekyll and Hyde* という彼の新著を買ってひろい読みをしていたところ、大いに期待して耳を傾けた。

おしらせしたテーマより少し対象を拡げて、啓蒙がエディンバラのリテラテイにとって何であったか、という話をしたい、というので一層私は張切ったのだが、話はほほスコットティンズム（スコットランド弁）に集中し、新たにマイクロ・フィルムで読めるようになった出版業者のクリーチの手紙から引例しながら、世紀なかばから八十年へかけ、一貫して彼らの努力は、「アディスンのごとく書き、ギャリックのごとく語る」ことに傾けられていたことを強調する。そして、A・カーライルが危惧したように、ジョン・ブルのユーモアだけがユーモアと感ぜられる、といった形で、エディンバラが貴重な何かを失ったことは確かである。しかし彼らのめざしたのは、イングランド人になってしまふことではなかったのであって、その過程でスコットランド人の土性骨まで変質させられたとは思えない、として、八十年代開明人士の代表、アースキン *Henry Erskine* のブローディー裁判における結語（前掲書一〇二—一〇三頁参

照）を読み上げてしめくくった。だれかけた話をとまか最後にカチツとしてみてみせたところは見事であったが、聴衆の不満は皆同じだったようで、早速オクスフォードの会員が、「現在でもスコットランド弁は生きているが——皆ニヤリとする。ギブスンも相当なまるのである——それはイングランドのわれわれが聞いて十分に理解できる。十八世紀のなまりはもつとひどかったかも知れぬが、それにしても、その問題がスコットランド啓蒙の新局面をなす、というお話しのようにきこえたが、そういうものだったろうか」と切り込んだのは尤もであった。

7

午後は、エディンバラ大学工学部のヒッグズ *Malcolm Higgins* 教授が、「エディンバラ新市の建築」*The Architecture of Edinburgh's New Town* と題する講演を行った。話はかなり専門的な建築様式にかかわるものであったが、豊富なスライドを駆使しての説明は、新市の建設と建築が大ブリテン全体としてもやはりモニュメンタルな地位を占めるものであることを納得せしめた。エディンバラは、おそらく今日でも、世界でもつ



とも美しい町のひとつだと思ふが、私にはその美しさは、周辺の海や川や山や野原が、町のどこに立っても街並みの背景として、ワン・ショットごとの景観のなかに生かされている点にある、と感じてきたのだが、それがまさに設計者の狙いだったことを教えられ、新市建設が、スコットランド啓蒙の、今日も眼のあたりにすることのできる巨大な成果であるとの感を深くした。

講演につづいて新市の建築物の見学がある。建築物のなかには、先ほどスライドで見た美しいアダム・ビルディングのひとつが、前世紀末に行われた不様な増築工事のために、原型はわずかに屋根だけからうかがえる、といった例もあつて考えさせられた。それも、エディンバラ最大のバス・ターミナルの真正面の話なのである。皆が大きくベンキで書かれた John Glen-dinning & Sons Ltd. Kitchen Equipment and Bathsuites — A Specialty という外壁を睨みつけてブツブツ言っていると、ヒッグズ教授が、「あの店が破産して、原型に戻すチャンスが生れるのを祈りましょう」といつて一同を笑わせる。

三日間にわたる盛沢山日程の最後は、新市街の西端をおさえるシャーロット広場に面したビュート・ハウスの見学であ

る。第五代のビュート侯が Secretary of State for Scotland のいわば官舎として提供した建物。ジェイムズ・ステュアートの亡命からの帰国に尽力したり、ウィルクスの攻撃の矢面に立たされた首相のビュートは第三代のビュート侯である。

十八世紀末の貴族の台所をそのままに復元してある地階に降り立った私は、そこで面白いものをみつけて思わずニコニコしてしまった。『国富論』を訳している時に、適訳が思い当らずに困ったもののひとつに、第四篇第七章で出てくる sugar loaf というのがあつた。その実物が黒光りした大きな配膳台の真中にデンと立っていたのである。高さは優に一メートル、底部の直径は三十センチ近くもあるうか、先細りのロウソクのお化けといった代物であつた。そのそばには、二種類の砂糖切り sugar-cutter が備えてある。第一のは、巨大なヤットコと裁断機を組み合わせたような機械で、これでまず横に寝かせた棒糖を輪切りにすると見えた。もうひとつの道具は、輪切りにしたものを、テコの原理を応用して、さらに細かく割るためのもの。アダム・スミスはたいして食道楽とも思われず、砂糖のかたまり(わが国では「氷砂糖」などと誤読しているむきもあるが)が大好きで、お客さんがいるのに砂糖入れ sugar basin を抱

え込んでほきりなしにしゃぶってしまふものだから、従姉のジエイン・ダグラスがひたたくてかくしてしまった、というエピソードが残っているが、スマスがしゃぶっていたのは、こうして砕いた砂糖だったにちがいない。

一緒に歩いていたアメリカのルアーズ Robert B. Luers に、言葉を探しながらこの話をする、「本当にエディンバラには十八世紀が町のどこにもまだ生きてますね。一度に余り沢山見たり聞いたりして、頭のなかはまさに Hess だけでも、エキサイティングな場所でのエキサイティングな学会でしたね」という。それはまさに私の感想でもあった。

(在・エディンバラ)